

批判を一つ一つ詳細に取り上げている訳ではないため、本発表では臨済禅と対立する道元独自の立場を①「見性批判」、②「修証一等」、③「只管打坐」という三点に限定して、これらの点に対して大拙がどのように論じているかを考察した。

大拙は『禅思想史研究第一』(一九四三年)、そして『禅の思想』(一九四三年)の二書で、道元の禅思想について、積極的な解釈を試みている。

道元の見性批判をめぐって大拙は彼とは異なる見性理解を示していることを確認した。そしてそのことによってむしろ大拙の主張内容が道元の批判内容と軌を一にしているということを確認した。道元は、「見性」を語義通り、「性を見る」という構造で捉え、悟りとして個的で常住名「性」を想定することは外道の見解であると批判していた。一方大拙は「見性」を「見即性」という関係とみなすことで、「見性」を主張しつつも、道元と同じく個的で常住な「性」を否定するという結論に至っている。

また、道元は公案を駆使して修行する臨済禅を「待悟禅」として批判し、証と不可分のものとして修行を位置づけた。この「修証一等」の思想について、大拙は見性の内容たる「定慧不二」によってそれを説明した。すなわち悟りそのものと、働きの出す智慧という構造を道元の「証」と「修」に適用したのである。道元にとって本来、見性とは無縁の実践として想定されていた「修証一等」を、大拙はむしろ見性体験の内容として理解しようとしたのである。

その結果、「修証一等」の具体的な行法としての「只管打坐」

についても、大拙はそれを悟りの働きが現れている「大用現前」の坐禅として位置づけ、見性の現場としての坐禅とみなしたのであった。しかしながら、道元が仏行として坐禅を特別視していたのに対して、大拙は坐禅をあくまでも悟りの多様な表現の一つとして理解しようとした。彼は「定慧不二」の「定」を単に坐禅による精神の統一状態とはみなさず、人間の一挙手一投足すべての行為が「定」となりうると考えており、そのため「大用」が現前する行を坐禅だけに限定せず、人間の振る舞い全般をその行であると捉えたのであった。

以上のように、大拙の道元理解は、見性批判を展開した道元を、一貫して見性の立場から解釈するというものであった。このような解釈が道元の真意に合致するかどうかには多数の問題があるが、大拙自身の思想を理解する上で、このような解釈は重要な要素を内包しているように思われる。

鈴木大拙と華嚴経

嶋 本 浩 子

鈴木大拙(一八九〇—一九六六)は、海外に対して、主に禅思想を紹介したことで知られる。しかし、大拙は、華嚴経思想も重視していた。そこで、本稿では、大拙と華嚴経思想について検討したい。

大拙は、昭和三十年に著述した『華嚴の研究』の序文で、『華嚴』のことはずっと昔から気にかかっている、今でも「そ

れを何とかしないと死に切れぬ」という心持になっている。」
 （『鈴木大拙全集』第五巻、一三七頁）と述べている。大拙が華嚴経思想を語る際の特徴として、次の六点があげられる。それは、東洋と西洋の相違を述べる点、東洋の思想の特長を語る点、西洋の人々に対して語る点、その傾向は大拙の晩年になるほど強く現れる点、二元を超えるあり方として語る点、東洋の和のあり方を示す点、である。大拙は英文著作において、二元を超えることをたえず主張している。そこで、華嚴経思想を語る場合も、「相對の世界をどこまでも究極の實在だと考えようとする人間の頑固さがもたらすところのあらゆる障壁を除去すること」を目的としていた。なぜなら、二元を超えた世界の奥には、大乘仏教が示す不二の世界が開かれるからである。

大拙は、事事無礙法界を重視した。理と事の不二を説く理事無礙法界に対し、事事無礙法界は、理が消えて、相互の事のみになった世界観である。さらに、大拙は、相即相入を重視した。これは事事無礙法界の作用面であり、空からの用、すなわち、空からのほたらきを重視したと言える。それは、即非の論理、無分別の分別、無功用行、大用現前不存軌則、真空妙用が示すように、空からの絶対的なほたらきを重視したからである。このことは、「色即是空空即是色」の空即是色が示すように、空から色へのほたらきを重視する大乘仏教観に基づいている。それを、大智と大悲が不二となつてはたらくと、大拙は表現した。それは、大拙が紹介する禅による個の確立と自由とを重視する基本姿勢でもあると言えよう。現代的解釈をすれば、個人の想い、言葉、行動が二元を超えた空からのほたらきとな

つて、一瞬一瞬を生きることの重視を提唱したと考えられる。その示すところは、一人一人の想念・言葉・行為が空からのほたらきとなると、その時立ち現れる現象が人智を超えたあり方となるとところに妙を観じることである。だからこそ、晩年の大拙は、特に真空妙用という言葉を重視した。

大拙の事事無礙法界理解は、真空妙用と深く結びつく。大拙は、事と事とが単に対象的に無礙に関係するという教理的解釈にとどまらず、事事無礙の構造性とその相即相入の言葉があらわすほたらきを人間の生き方に当てはめた。すなわち、妙用が根源となつて、礙げあうことなく、自在でいながら、自ずと調和するという人間としての生き方、あり方であると言える。そして同時に、大智大悲が不二となつてはたらく人間同士のあり方を、事事無礙法界を通じて紹介したのである。大拙が主張する華嚴経世界観は、東洋あるいは大乘仏教が理想とする人間社会のあり方ともいえる和の精神の紹介である。これこそが東洋の平和の精神と考える。さらに、大拙が示す事事無礙法界のあり方は、人間と自然とのかかり方にも適応できる。したがって、環境問題を考えるときにも、良き指針となろう。

大拙最晩年の英文著作は、*Sengai, the Zen Master* である。同書でも、大拙は仙厓の書画を通じて華嚴経思想を海外に紹介している。大乘仏教を知らない人々に対してその思想を象徴的に訴えたのである。それは、視覚的に理解しやすい方便であった。このことは、大拙が最晩年まで華嚴経思想を海外に紹介したいと考えていたことを示す根拠となろう。